

我が家の放牧導入の試みと足寄町放牧酪農研究会の取り組みについて

佐藤 智良

足寄町足寄町〒1889 089-3872
 十勝農協連 帯広市西3条南7丁目14 〒080-0018
 足寄放牧酪農研究会

私が酪農を経営している足寄町は十勝管内の東北部に位置しており、面積1,400平方キロメートルで日本最大の町として知られています。足寄町の平成10年度の総農家戸数は約380戸で、そのうち生乳出荷戸数は約3割の120戸、出荷乳量は年間40,000 tです。

我が家の経営概要

私の牧場は寒冷山間地という厳しい自然条件の足寄町の丘陵地にあり、昭和50年から現在地において酪農を行っています。現在の経営状況としては、77.5ha（採草地43.5ha 放牧地29ha 兼用地5ha）の草地に、100頭程度（経産牛53頭 育成牛49頭）を飼養しています（表1）。

私が放牧を導入するまでは年間1頭当たり10,000kgを目指し、いわゆる“高泌乳・濃厚飼料多給型”の酪農を実践していました。しかし、その当時は乳量を搾ることはできても、その反面、繁殖障害

や乳房炎などの疾病も多発し、思うように経営内容を好転させることもできず、日常生活にゆとりを感じられることはありませんでした。このようなことから、このままのスタイルで酪農を続けていくべきか、あるいは違うスタイルにするべきか、夫婦で悩み、考えました。そして、出した結論は、『与えられた土地（草地）条件を最大限に生かそう』、つまり、放牧への取り組みでした。

放牧酪農研究会の誕生と取り組み

放牧への取り組みにあたってはまず、放牧を実践している先進事例の研究を始めました。そして、平成元年に浜頓別町池田邦夫氏の牧場を視察する機会を得ることができました。その際に自然に逆らわない経営を目の当たりにし、改めて今までのスタイルに疑問を感じるとともに、放牧への取り組みを決心しました。また、池田氏からは、『放牧をするなら本物を見るべき』というニュージーランド視察の勧めもあり、実際にニュージーランドまで足を運び、ますます放牧への思いが強くなりました。

こうしたことから、同じ町内の酪農家の黒田氏とともに、町内に仲間づくりをもとめ、平成8年4月に、『ゆとりある牛飼い』・『おいしい本物の牛乳をつくる』・『農家自身が主体性をもった農村づくり』をモットーとして、7戸14人のメンバーで放牧酪農研究会を発足することができました。また、農協、役場、普及センターの強力な支援もあり、平成9年度からは飼料生産対策事業（集約放牧酪農技術実践モデル事業）が実施され、牧道・牧柵、給水施設を整備することができ、メンバー

表1 経営概要

家族労働人数(人)		2.1
草地面積(ha)	放牧地	29.0
	兼用地	5.0
	採草地	43.5
	山林	29.5
	施設・住宅	3.0
	合計	110.0
飼養頭数(頭)	経産牛	53
	育成牛	49
	合計	102
平成10年 出荷乳量(t)		432.7
乳飼比(%)	経産牛	18.6
	全体	20.6

全員が本格的に放牧を取り入れることができるようになりました。

研究会の活動は、月1回（農繁期を除く）程度の情報交換、お互いの農場や放牧地を巡回しながらの現地研修、年2～3回の視察などを行っています。情報交換の中では、放牧のこと、自分達の経営のことだけに留まらず、自分達のこれからの生き方までも深夜に及ぶまで討論することもあります。メンバーが共通の目的を持ち、こうしたことを繰り返すうちに、皆同じ町内で酪農をしていたにも関わらず、今まで知らなかった面がわかるようになったり、互いに刺激を受けながら、信頼関係を築いていくことができたと思っています。さらに、研究会の活動の中では、当時、北海道農業試験場放牧利用研究室の落合氏に基本的な放牧技術について指導頂いたり、浜頓別町の池田氏や中標津町の三友氏にも来て頂き話をした中で、技術的な面だけでなく、酪農に対する考え方について大きな刺激を受けました。

また、私たちの研究会の大きな特徴として、『夫婦2人で参加する』ということがあります。通常夫婦2人で酪農をしていても、経営は旦那に任せっきりになりがちですが、酪農の仕事は勿論のこと、家事、育児などもこなす奥さんの考え方は尊重されるべきであり、さらには家族全体の理解なくしては経営を確立することはできません。夫婦での活動を通して、放牧に関するさまざまな知識についても、夫婦共々理解を深めていき、おたがいがこれからの経営を考えていけるように心がけています。こうしたことから、奥さんの経営への関心は次第に高まるとともに、これまでに増して、明るく、たくましくなり、今ではチーズやアイスクリームなど乳製品加工へ取り組み始め、ますます酪農への意欲を高めています。

我が家の放牧利用状況

次に私の牧場における放牧利用状況について簡

単に紹介したいと思います。

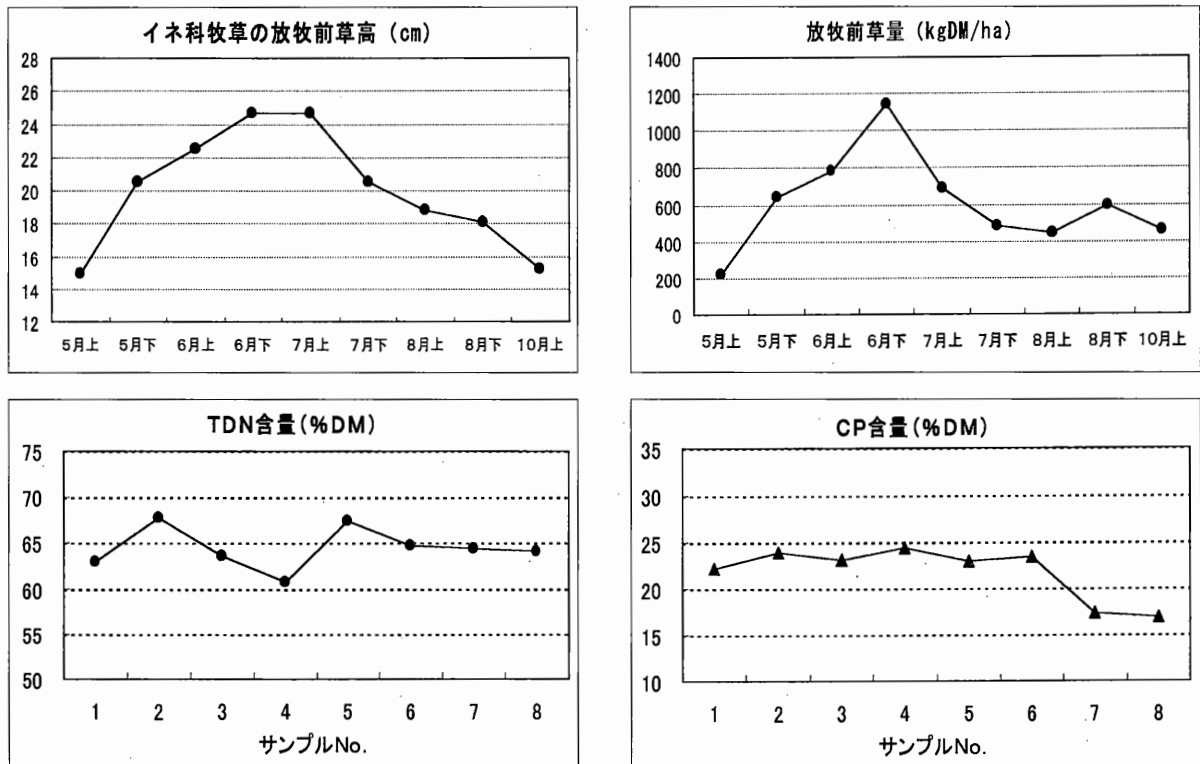
現在、放牧地を面積約1haの24牧区に区切り、1日または半日単位の輪換放牧を行っています。放牧開始は4月末頃で、この頃になると放牧地の雪が無くなり、牛が歩いても問題ない状態になり、少しずつ放牧草に慣れさせることも考え、やや早めに放牧を始めています。放牧地には前に述べた飼料生産対策事業（集約放牧酪農技術実践モデル事業）により給水施設を設置し、牛舎から各牧区への牧道を整備したこともあり、牛の移動作業も楽にできるようになり、また、降雨によって泥濘化することもなく、牛の体が汚れることはほとんどありません。

放牧地の草種はチモシーが主体であり、参考までに平成10年の放牧期間中の草高・草量および栄養成分の推移を図1に示しました。放牧を始めてから、年々牛も放牧地で草を食べるようになってきましたが、放牧地全体を考えると採草地を放牧地に変えたこともあり、雑草や草の密度、さらには牛が喜んで食べてくれる草を作るための土作りについて、これからも経験を積みながら取り組んでいきたいと考えています。

また、乳生産については平成10年の乳検成績について図2に示しました。この結果では放牧期間中の乳成分の低下にはまだ課題があるように感じられます。しかし、放牧を始めてから、搾乳牛の飼料給与回数は4回から2回になり、自由になる時間が持てるようになり、乳房炎、ケトージスなどの代謝障害による廃用はほとんどなく、高乳量を目指していた頃よりも精神的に余裕をもって仕事ができるようになりました。

今までを振り返ってみると、これまでは何とか高乳量を目指して、無理に複雑な飼料管理をして、牛にも人間にも重労働を課してきました。しかし、放牧を始めてから、本来の酪農の目的は乳量ではなく、家族がゆとりをもって生活できる所得を得ることであることに気づきました。また、牛の能

我が家の放牧導入の試みと足寄町放牧酪農研究会の取り組みについて



サンプル採取日 1:5/15 2:6/24 3:7/12 4:7/30 5:8/13 6:8/25 7:10/5 8:11/2

図1 草高・草量および栄養成分の推移 (平成10年)

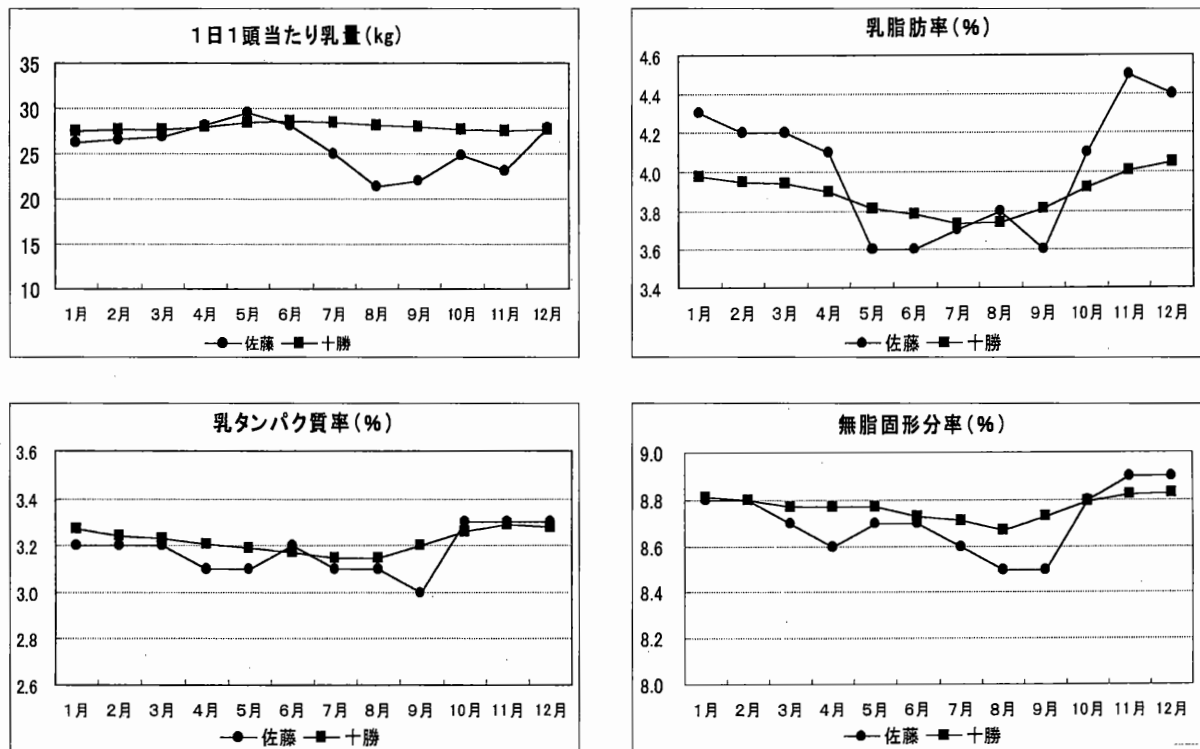


図2 乳生産の推移 (平成10年)

力もこれまでは乳量だけで評価していた面もありましたが、本来、牛は自分で自分のエサ（草）を収穫する能力を持っており、この能力を発揮できるようにし、大事にしていくことで、牛も人間も健康に生活していけるのではないかと考えています。

最後に

近年、酪農情勢が厳しくなる中、私は放牧に取

り組むことにより、明確な目的をもって酪農を営んでいくことができるように感じています。それは同じ目的を持ち、行き詰まったときでも互いに支え合ってきた放牧研究会のメンバー、農協、役場、普及所、さらには、放牧研究会の活動を通していろんな人々との出会いにより勇気づけられたおかげです。これからも人間と牛が共有し合える放牧酪農を確立できるように取り組んでいきたいと考えています。